

歴史と文化：星を見つけ、座を描く

土屋和男 | 常葉大学造形学部教授

もうすぐ、条件を代入すれば（ある程度の）設計が生成されるようになるだろう。しかし、建築が土地に定着するものである以上、同じ場所はひとつとしてなく、その性格は異なる。地質などの物理的な場所性はデータ化されるだろうが、歴史的、社会的な場所性は固有の条件で一般化できない。その場所はどんな使われ方をしてきたのか、周辺にはどんな人が住んでいるのか…。人が（AIにはない、取り換え不可能な）身体を動かしながら環境を理解し言語化していくように、建築は（AIにはわからない、取り換え不可能な）場所性を分析しながら形づくられるものである。AIは「歴史」を字面の上でしか知らず、現実の土地や身体と結びつけて表現することができない。建築が人の身体を包む器であることと、歴史を体現していることとは不可分に結びついているようだ。

「歴史」とはストーリーだ。過去の出来事の集積だが、それを全て再現することは不可能だ。なぜならそのためには同じだけの時間が必要だから。したがって、歴史は過去を抽出した物語にならざるをえない。ヴァルター・ベンヤミンは、歴史について考えるとき、星座の比喩を用いた。それぞれの出来事は輝く星である。しかし、夜空の星々を読めるようにしているのは、それらをつなぐ見えない線、すなわち座である。星々という「物」に座という「物語」が与えられて、それらが語れるようになる。

さらに、星々が輝くには、闇が必要だ。星は昼間でも出ているが見えない。暗い背景があって、それらははじめて輝く。見えている星（出来事）の後ろには、それとは異なる、見えないもの、見落とされたものがあるはずだ。その見えないところに目を凝らすと、あるいはもっと暗いところに行くと、その中にも星が見えてくる。さらにその後ろには…。「歴史」として語られる背後には、必ずそこから抜け落ちていくこと、忘れられた人々がいる。逆説的に、今まで闇と思われていた中から、新しい座を描くことも可能なのだ。

建築士会の特徴は多様性だと思う。他の建築関係団体に比べ、数の多さと職種の広がりが必要だ。地元の人しか知り得ない細い道を抜けると、古い建物があることを知っている。一見ささいなことから、技術的な意義を見出せる。小さな星々を発見するには、多くの眼が必要なのだ。そして、集めた星々を集約し、つないでみる。ここに新しい星座、すなわち歴史が現れるかもしれない。星座＝歴史によって、それぞれの星の位置＝建築の価値も決まる。



1968年東京生まれ。工学院大学卒業。芝浦工業大学大学院修了。博士(学術)。一級建築士。専門は近代日本建築史。著書に『都市デザインの系譜』、『私鉄郊外の誕生』、『境界線から考える都市と建築』（いずれも共著）等。論文に「近代数寄者の茶会記録に見られる「田舎家」に関する記述」、「興津における近代の別荘の形成とその背景」等。静岡県建築士会会員。

静岡の地域特性を知るのは、地元の建築士。

石川春乃 | 静岡理科大学建築学科准教授

ご自宅の窓をいつ、どんなとき、開けますか。一昔前の「季節を問わずどこも開けっ放し」とはいかなくても、なるべく窓を開放し、季節を感じ、ほっとするような住まい方を実践されている方が多いのではないのでしょうか。

建築物省エネ法は、外界と遮断した建築空間での性能を計算します。北海道をはじめ北方の住空間では、厳寒期の対策が基本です。しかし、はたして外気と完全分離した室内空間の『快適』が、外気を通す季節や時間が多い温暖な静岡での生活に馴染むのでしょうか。

2025年の建築物省エネ法改正で、すべての住宅・建築物基準値適合が義務化されます。建築設備（冷暖房・換気・照明・給湯等）の運用によるエネルギー消費量を計算して、『基準値』より抑えた値であることを確認するのです。住宅だと建築物の外皮（窓・外壁・屋根等）の断熱性能も評価されます。

この『基準値』とする基本仕様は「平成11年基準相当の外皮と標準的な設備」です。しかし、静岡県下の既存住宅等では外皮断熱性能どころか基準相当の設備も殆ど無い場合など、そもそもエネルギー消費が極めて少ない事例も多くあります。改修や新築の工事後、建築物省エネ法書類上ではエネルギー消費量が激減しても、施主様にとっては逆に、光熱費が増え満足感を得られない、ということもありません。当然です。無かった設備を新設し、使えば使うだけエネルギー消費をするのですから。

静岡型の『快適』とは、外界と遮断した機械設備依存の住空間ではなく、必要に応じて設備利用を選択できる四季感をもった生活空間を指すのではないのでしょうか。

静岡の地域特性を知るのは、地元の建築士。建物利用者の『快適』は、建築環境計画に携わる建築士の腕次第です。ZEHや長期優良住宅、品確法省エネ等級等の適合は省エネ計算の結果で得られるかもしれませんが、そもそもエネルギー消費が多くない施主様に、光熱費大幅削減と今まで以上の『快適』を実現するには、恵まれた自然環境を生かし、地域特性に応じた環境計画をどのように最適化するか、地域を知る建築士の知恵と工夫が重要なのです。

様々な環境性能に良い技術が開発され、基準や法制度が強化されていきます。法改正も対応項目は、省エネ性能ばかりではありません。とても対処しきれない、効率的に知識を得たい、と思ったら、建築士会へ。仲間と共に『静岡の気候風土を生かした建築・住宅』の情報共有、始めませんか。



静岡県静岡市生、同在住。早稲田大学卒業、その後、修士取得、博士課程満期退学。専門分野は建築環境工学。行政職や設計事務所等を経て2018年から現職。静岡県住生活基本計画や県有施設ZEB化設計指針、浜松市温対実行計画等、脱炭素化への県下施策立案に多数参画。設備設計一級建築士。静岡県建築士会会員。